

JAZZが奏でる ニューオリンズ市と松江市の『縁』

(財)自治体国際化協会交流支援部交流親善課 原田 知也(群馬県富岡市派遣)

はじめに

島根県松江市では、2007年から5年間を「松江開府400年祭」としており、松江城下町の誕生、松江城の築城から、現在にいたるまでの歴史を検証し、祖先の偉業を改めて学ぶとともに、松江の良さを多くの方々に知っていただき、今後の発展に活かしていこうと様々なイベントを計画・実施しています。その中で、松江市と友好都市提携を締結しているアメリカ・ニューオリンズ市との交流事業が、当協会の実施をしている「地域国際化施策支援特別対策事業」の採択事業となり、事業の実施状況について今回取材をしてきました。

事業の概要について

松江市とニューオリンズ市の交流を語る上で、小泉八雲の存在は欠かすことはできません。彼が日本で過ごした14年間のうち、約1年3ヵ月を松江市で過ごしており、一方、ニューオリンズ市は、彼が来日前に住んでいた都市でした。両市は、そのような彼の軌跡と、水都であるという共通性から交流が深まり、1994年に友好都市提携が締結されました。これ以降は、行政間の交流だけでなく、経済・文化・教育など幅広い分野において、民間も含めた交流が行われていましたが、2005年のハリケーン・カトリーナがニューオリンズ市を直撃したことにより、具体的な交流が途絶えてしまいました。今回の事業は、ニューオリンズ市からJAZZ奏者を招へいし、「まちづくり・ひとづくり」を目的とした企画に活用するとともに、それをきっかけとして、ニューオリンズ市との交流を復活させようとする取り組みです。

カラコロ広場でミニライブ

2011年9月10日のフェスティバルに先駆けて、9月9日の夜、ニューオリンズ市を拠点に活動するプロのジャズ演奏者で構成された松江市のためのスペシャルバンド「サトル・オーハシ&ニューオリンズ・ジャズ・ガンボ」のミニライブを行いました。会場であるカラコロ広場は、京橋沿いに位置しているヨーロッパスタイルの広場で、堀川遊覧船の発着場が隣接し、市民の憩いの場となっています。19時をまわった頃、彼らの演奏と共に人々が集まり出し、会場は市民の方々にいっぱいになりました。幅広い年齢層の方々が演奏に聞き入っていたのがとても印象的でした。そして、市民の方々は演奏が終わった後も、松江市国際交流員の通訳を介して演奏者と意見を交換していました。かつて、松江市の中心市街地にはジャズが流れる喫茶店があり、ジャズの拠点として賑わっていたそうです。今回のイベントはその賑わいを彷彿させるものであり、国際交流事業がまちづくりにつながっていく素晴らしい取り組みであると感じました。

松江城 JAZZ フェスティバル

フェスティバル当日、雨が落ちそうな曇天でしたが、それを吹き飛ばすように松江城二の丸下の段に設けられた会場は大勢の来場者で埋め尽くされ、熱気で溢れていました。司会者の問いかけに答えた参加者の反応から、約4割が市外からの来場者であることがわかりました。「サトル・オーハシ&ニューオリンズ・ジャズ・ガンボ」をはじめ、「大野雄二&ルパンティックファイブ」などの演奏に会場は大変盛り上がり、途中から降り始めた雨にも、ほとんど帰るお客さんはいませんで

した。演奏の素晴らしさもさることながら、コンサート全体を通して、松江市とニューオリンズ市が友好都市であることに対する強いメッセージを感じることができました。例えば、司会や、演奏者からは松江市の友好都市がニューオリンズ市であることが繰り返し紹介されており、会場に設けられたフードコートにおいては、ニューオリンズ市の名物であるクレオール料理の中から「ジャンバラヤ」と「ガンボスープ」が販売されていました。また、



松江城JAZZフェスティバルの様子

地元のジャズバンド「ラメールジャズオーケストラ」が出演していたことや、多くの地元の若者が運営スタッフとして参画していたことから、地域全体で育まれた事業であることがわかりました。

「音楽クリニック」

～本場ニューオリンズ JAZZ の演奏法を学ぶワークショップ～

フェスティバルの興奮も冷めやらぬまま、翌日に実施された「音楽クリニック」という事業は、サトル・オーハシ&ニューオリンズ・ジャズ・ガンボのメンバーが、子供たちにニューオリンズスタイルのジャズ演奏法を教えるというユニークな取り組みです。これは、マーチング演奏で有名な立正大学浜南高校を会場に、島根県吹奏楽連盟松江支部との共催事業として実施したものです。

参加者は約60名で、小学生から社会人まで幅広い年齢層が参加しました。また、松江市国際観光課からも音楽経験のある職員も自らワークショップに参加されました。今回は、「聖者の行進」をジャズ風にアレンジするというテーマで、パートごとの指導を実施した後、全体で演奏を合わせました。

ニューオリンズスタイルということで、即興性に富んだ演奏に子供たちが真剣に、わくわくした表情で取り組んでいたのは、とても記憶に残っていま



音楽クリニックの様子

す。子供のうちから、本場ニューオリンズのJAZZ演奏に触れ合えることは、子供たちの音楽や国際交流に対する意識を醸成させ、育んでゆくには最高の機会となったに違いありません。

上を向いて歩こう

～共に災害を乗り越えて～

さて、今回の事業で特徴的だったのは、東日本大震災における災害支援です。フェスティバル会場においても、募金活動が行われていました。

前述したように、ニューオリンズ市もハリケーンカトリーナの甚大な被害を受けており、被災の経験を有しています。そのような経緯により、演奏者からも東日本大震災への配慮が随時見受けられました。特に、奏者サトル・オーハシ(大橋諭)氏は宮城県の出身であり、故郷への思いを語っていました。

フェスティバルにおいて、彼は、「ハリケーン・カトリーナの際、こころに大きな傷を負ったニューオリンズ市の人々も日本の歌に励まされました。そして、今度はその曲を日本の被災地に向けて演奏します」と言い、演奏した曲がありました。その曲名は、「上を向いて歩こう」でした。素晴らしい音楽には、国境を越えて、人々を勇気づける力があると感じました。

交流再開へ

今回の事業が後押しとなり、10月には松江市長がニューオリンズ市を訪問し、現地でニューオリンズ市役所関係者をはじめ、多くの市民の方と会うことができたそうです。その結果、具体的な交流の実施に向けて、明るい兆しが見えてきたと伺っています。今後、一日も早く交流内容が決定し、両都市の絆がより深くなることを願っております。

今回の報告にあたり、松江市国際観光課の皆様にご多大なご協力をいただいたことに対して、この場を借りて感謝申し上げます。取材を通して「市民の国際交流」を推進する同課の熱い思いを感じることができました。

再び松江市を訪れた際は、JAZZ（もちろん、ニューオリンズスタイル）が聞こえてくることを期待して終わりとします。